

歓びの娘

鑑定医シャルル

藤本ひとみ



集英社



飲むの

鑑定医シ

藤本ひとみ

集英社

飲^{よるこ}びの娘^{むすめ} 鑑定医^{かんていい}シャルル

一九九四年 六月一〇日 第一刷発行

著 者 藤本ひとみ^{ふじもと}

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
郵便番号 一〇一―一五〇

編集部 (〇三) 三三三〇一六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

株式会社 美松堂

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

飲
び
の
娘

鑑定医
シャルル

装幀／明比朋三
装幀写真／縣正三

1

深い闇の底にミシエルは横たわり、目を凝らしている。

大ブリテン島を追われた先祖ケルト人、この地を海の国と呼んだガリア人、攻めよせて来たローマ人、その征服者であるノルマン人。数々の血の奔流がぶつかり、鬨ぎ合い、多くの命を生み落としていく様子を、夜毎、見つめている、やがてそこから自分が生まれ出るまで。深々と続く流れは、まもなく彼の位置で完結するのだ。

誰かが叫ぶ。これは完全犯罪だと。言葉がミシエルを勇気づけ、自信をあたえる。

完璧に隠された犯罪は、そこに犯罪があるという事実さえ、消してしまふ。被害者も加害者も存在しない。

ミシエルは、見開いた目に微笑を浮かべる。

完全犯罪だ。ただ待てばいい。時が迷宮の扉を開く。

闇の底がわずかに白み、彼を手招きする。

ミシエルは立ち上がる。やせ細った体が、重さを増すばかりの精神をかりうじて支え、ぎこちなく動かす。

彼は、一糸も残さず服を脱ぎ捨て、衣装箱の扉を開ける。内側の鏡に映る裸の自分の、なんと美しいことだろう。

ミシエルは、全身を隈なくながめまわす。両腕を伸ばして自分を抱きしめ、口づけ、指をからめていとおしみながら、いつもの恋の儀式の幕を開ける。ひとりの世界の甘美さに酔い、官能の呼び声に應えて飲ぶの果実を摘みに行く。

「あいつは、どこ。出なさいよ。あのあばずれ小娘」

熱り立った声^{いき}が、階下で響く。アデルは片方の脚を椅子の上へ上げ、黒いストッキングをはいている。おろし立ての絹のしなやかな光沢が脚にまつわり、深い森のように彼女を包む。

「あたしの客を盗りやあがつたんだよ、あの淫売の藁布団め」

怒鳴っているのは誰だろう。一刀流のエリザ、倒錯のマルゴ、それとも覗き部屋^{のぞ}のナナ。興奮した女の声は、皆よく似ている。

アデルは、ガーターにストッキングの端を留め、チェストの下から黒革のハイヒールを出した。履いて鏡に向きなおる。よく磨きこんだミルク色の肌、黒のレースで揃えた上下の下着。後頭部に結んでいたゴムを片手でほどくと、金髪が肩から背中^{せう}にこぼれ落ちた。

「素人だったあの娘にいろいろ教えてやったのは、このあたしだよ。脚のしめつけ方から

背中にくねらせ方まで、男を第七天界に昇らせるありとあらゆる方法を、このあたしが教えてやったんだ。長い間に身につけた宝のような技術をさ。なのにあいつときたら、私の一番の上客に手を出しやがって。恩知らずの靴拭め」

アデルは微笑し、それを細かく点検する。斜めに自分を見すえて片腕で髪をかき上げ、項の角度と赤く塗った唇の開き具合が、男を挑発するに足ることを確かめる。

「あたしは、あの人と約束してたんだ。いつか所帯を持とうって。あたしは店をやめ、あの人と結婚し、あの人だけに抱かれて、あの人の子供を産むはずだった。なのに、あの小娘がめちゃくちやにしゃがった」

アデルは衣装簞笥を開け、彩度の高い黄のスーツをハンガーのまま取り出すと、手首をまわして背中に引っかけ、部屋を出た。足早に廊下を歩き、ホールの階段をかけ下りようとしたとたん、階下で唸るような声がかかる。

「アデル、この盗っ人の煙突女」

アデルは視線を下ろし、ゆるやかな螺旋をえがいた階段の下に牙をむき出さんばかりにしてこちらをにらみ上げているナネットを見つけた。脇で女将が、閉口した様子で溜息をついている。

「まあ、ナネットだったの」

アデルは、わざとゆっくり微笑みながら、男たちを誘う時に使う優美な足運びで階段を下り、彼女の前に立った。

「ごめんなさいね。でも盗ったわけじゃないのよ。あの人の方が、私を指名してきたんですもの。どうしようもないわ。私は飲みの館の娘だもの」

アデルの口調は、優しく甘い。

ナネットは身構える。砂糖菓子のようなアデル。だがたいていの菓子は、見かけと中味が違っているものだ。味は、しだいに辛辣しんらつになるに決まっている。

「どのみち十歳近くも年が離れるのなら、上のあなたより下の私の方がよかったということでしょうね。それに私は」

一瞬、語気を強めてアデルは言葉を切り、ナネットと女将の注意を充分引きつけたうえで、悠然と口を開いた。

「ナネット、あなたがとくにレスボスに引越したものだばかり思っていたわ。新入りのジーナを、浴室でずいぶんとかわいがっていたじゃない」

たちまち女将が顔色を変え、ナネットに向き直る。

「ジーナが男嫌いになったあげくに夜逃げしたのは、あんたのせいね。あれで、うちがいくら損をしたと思っているの。あの娘の負債は全部、こちらが肩代わりしてたのよ。ちょ

つとナネット、あなたねえ」

ナネットは、いまいましげにアデルをにらむ。

アデルは、うっすらと笑う。

「お楽しみが多くて、結構ね」

歯ざしりしそうなナネットを、アデルは、責任追及に夢中になっている女将にまかせてホールを横切り、奥の執務室の扉を開けた。

「朝の挨拶に来たわ。おはよう、愛人^{アマン}」

ソファに長々と体を伸ばしてパイプをふかしていたクレマンが、咳きこんで身を起こす。

「アデル、僕は君の愛人じゃない。そういう呼び方は誤解を招くね。他の娘たちのように、パパとお呼び」

その膝元に、アデルは、ハンガーから抜き取ったスーツを放り投げる。

「じゃ所有格をつけてあげるわ。女将の愛人の白い手のクレマンさん。着せて。時間がな
いの」

クレマンは、溜息まじりに立ち上がり、背広の襟の釦穴に通した梶^{くわな}の位置を直しながら黄色のスーツを取り上げ、アデルに歩みよった。腕に上着をかけ、両手でスカートを輪のように広げて跪^{ひざまず}く。

「どうぞ」

アデルが脚を伸ばしてその中に入ると、クレマンは後ろにまわってジッパーを上げた。

「素敵な肌だ」

息が耳にふれ、よく手入れされた髭^{ひげ}の先が肩をなでる。

「今度抱いて」

上着に腕を通してながらアデルが言うと、クレマンはホールの方に視線を流した。

「殺される」

アデルは髪をたくし上げて上着の外に出しながら、クレマンを見る目に笑いを含む。

「なぜ。商品に手を出すから。それとも女に手を出すから」

「両方だ。さ、行っておいで」

クレマンは、片腕をまわしてアデルの腰を引きよせ、頬にキスする。細く長い指の先でスカートの上から腰骨をなぞり、さりげなく自分の体を彼女の脇腹に押し当てることも忘れない。

「かわいい女豹」

アデルは、しだいに下りていく彼の小指をつまみ、目の前まで持ち上げた。

「あなたの頭と体は、まるで天国と地獄ね。頭は貞操堅固、体は淫乱、欲望に満ちている。

淫らな誘いを口では断りながら、なし崩しに相手を罠に引き入れる。先月追い出されたアイセは、自分から誘ったって言っていたけれど、本当に誘いをかけたのは、この白い指だつたんじゃないの」

クレマンは、アデルの手をふり切り、いらだたしげな笑いをうかべた。

「何が言いたいんだ、生意気なアデル」

猛獣が笑ったら、きつとこんな顔だろう。確かに情夫は獣に似ている。女に養われながら爪と牙とで女を守り、見張り、時には抱きしめて飲ばせる。素晴らしい野獣なら、そのまま素晴らしい情夫になる。若く精力的で逞しく、敏捷でしなやか、美しく、そして狡猾こうかつ。

「私を征服して」

アデルは、腕を伸ばしてクレマンの首からめ、身をすりよせて褐色の項うなじに唇をよせる。

「あなたの情婦マルミットになりたいの。一度抱いてみたらわかるわ。店の客たちがなぜ私に乗り換えていくか。たっぷりと教えてあげてよ、愛しいクレマン。今夜十二時に部屋に来て。待ってるわ」

クレマンの耳にかみ跡をつけて、アデルは素早く体を引くと、笑いを残して部屋を出る。

「雌狼め。今夜、調教してやるぞ」

淫靡な笑いのこもったクレマンの悪態を背中であきながら、アデルは扉を閉めた。スカ

トのポケットから黒いレースの手袋を出し、玄関に足を向けながら両手にはめる。

「オテル・ロワイヤル四十二号室、十三時ね」

ナネットを相手に目の色を変えて捲まぐしたてている女将に声をかけると、彼女は、あわててこちらをふり返った。

「最高級ホテルよ。出入りに気をつけて。うちで一番若い娘って、ご注文ですからね。せいぜい機嫌をとって、次もぜひ呼んでもらうようにおし。名刺をもらえたら、必ずもってくるよ。クリスマスカードを贈ると言うのよ」

言いながら歩み寄ってきた女将の耳に、アデルは声をひそめてささやく。

「どうしても、お話ししたいことがあるの。今夜一時ころ、私の部屋に来て」

女将は、うなづく。

「わかったわ。行つてらっしゃい。警察に出くわしたら、とにかく逃げるよ」

アデルは、微笑む。これで今夜も退屈せずにすみそうだ。

アイセが、クレマンとの濡れ場を押さえられてお払い箱になった一件では、彼女の稼ぎの悪さも遠因していた。今、稼ぎ頭のアデルを首にできるほどの勇氣は、あの女将にはない。さて、どんな嬌態を見せてやろうか。女将が一時に部屋扉を開けた時、自分とクレマンがいったい何をしていれば、話が一番おもしろくなるだろう。そう、答は決まってい

る。女将に最高の屈辱をあたえる姿でいることだ。

タクシー乗り場に向かって歩き出しながら、アデルは微笑む。まだ時間は充分にある。ゆっくりと考えて、効果的に演出しよう。そして心ゆくまで楽しむのだ。ふたりの狼狽と、苦悩とを。

ミシエルは、階段を下りる。下からは、カフェ・オ・レの匂いが上ってくる。本当は、ずっとベッドにいたかった。だが母に泣きつかれたのだ。

『お願いだから、少しでもいいから来て食べて。でないと体がまいってしまうわ。あなたの好きな物を作ったから。とてもおいしくできているのよ。ねえミシエル、お願い、食べて。学校がいやなら、行かなくてもいいわ。宿題もしなくていい。だけど食べることだけは、お願いだからしてちょうだい』

うるさくてたまらない。一刻も早く自分の安逸を取り戻すためには、とりあえず身を起し、食堂に足向けるしかなさそうだった。

階段の下の小さなホールを横切り、開け放たれた扉の中に踏みこむと、食事をしていた兄が一瞬、こちらに視線を向けた。

「よう、ミシエル」

リセ時代フットボールで鍛えた体は、兵役に行ってから一回り大きくなった。テーブルに乗っている腕など、ミシエルの大腿ほどもある。まさに肉牛だ。

「今朝は、食うのか」

声を聞きつけて、台所から母が顔を出す。

「ミシエル、よかった。来てくれたのね」

荒れた手をエプロンで拭きながら歩みより、両腕でミシエルを抱きしめる。

「ありがとう。さ、座って。食べてちょうだい」

母の引いた椅子に、ミシエルは黙って腰かける。兄は、不服そうにバゲットにバターをぬりつけ、口に放りこむ。

「機嫌をとってまで食べてもらうことはない。稼いでいるのはオレなんだから。まったく自分を何様だと思ってるやがんだ」

母はうろたえ、兄をふり返る。

「アラン、やめて。さあミシエル、いいのよ。食べて」

玄関先で電話が鳴る。母は、心配そうにしながらもベルに急ぎたてられて出ていく。

「おい、ミシエル」

アランが腕を伸ばしてミシエルの髪を鷲づかみにし、強引に自分の方に引きよせる。